たいですか？128 名となっていますが、知っているけど情報は知らないというのは、我々がもっともっと考えていかなければいけないと思います。

＜植田委員＞

キャリア教育を行っていると思いますが、仕掛けが大事だと思います。キャリア教育の一環をやっていて、子どもたちの夢や子どもたちが自ら考える機会がどれだけあるか、インターンシップというと簡単だが、自ら参画できるインターンシップ、アイデアやリアルな企業からの課題など、どれだけお膳立てができるかというように、そういった機会をどれだけできるかということが問われているのではないかと思います。そういう中で、先ほど 408 の母数とおっしゃっておりましたが、アンケートの中で 408 の母数で回答者が 164 というのが課題ではないかと思います。アンケートをどう出すか、誰に出すか、どう回収するかということも課題だと思いますし、アプリを作成するとおっしゃいましたが、アプリでよいのか？横浜市は iPhone を使っており、他は chromebook で・・・結局作ったが OS が違うので仕掛けが追いつかないといったことになってしまう。国は YouTube で発信しているので、web ベースで疑似体験でき信頼できるようなものを作りながら、「仕事のまなび場 Jr」の中では必ずどこの学校でも疑似体験させていくなど、仕掛け（仕込み）が求められているのではないかと思います。
※アプリ（適職診断）も web 上で可能である

＜岩谷委員＞

アンケート補足：3 年間　役員幹事校 55 校にアンケート実施

2-5．おわりに

先日、公立高校の志願者の倍率が発表されました。専門課程のほとんどが定員割れとなりました。

生徒たちに面接をする中で、将来何をやりたいの？と聞くと、「まだ決まっていない」というのですが、「決まっていない」というより「決められない」のが現状ではないかと感じます。将来の夢を持つことが大切で、その夢を持たせるのが我々の仕事です。キャリア教育という言葉だけに納めないでいく必要があると感じます。その中で、「仕事のまなび場 Jr」について来年度の申込をしました。続けてきていただくことが大切であると思います。ぜひたくさんの学校に申込みをしていただき、たくさんの子どもたちに良い経験をさせていただければと思います。　【北井委員】

今回、横浜デザイン学院さんの職業教育における進路というところのお話がある程度まとまっていたのではないかと思います。
将来設計のために自分をどう磨いていくか！そのために自分の将来と進学について、まずは「考える力を身につける」ということが大切だと思います。「好きを仕事に！」ということもありますが、仕事をやっていると好きになることもありますので、成長段階の生徒さんをどう指導していき、どう職業人として社会生活を送っていくのかということを支援していくことが大切かと思います。ぜひこれからもよろしくお願いいたします。　【

3－5　愛知県（担当校：安城生活福祉高等専修学校）

文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
高等専修学校の学びの「セーフティーネット」
令和４年度　地域連携委員会（愛知県）実施報告

開催校　学校法人さくら学園　安城生活福祉高等専修学校

1．会議の目的

当事業は「専修学校による地域産業中核的人材養成事業（学びのセーフティーネット機能の充実強化）『高等専修学校の機能高度化に関する調査研究』 」という名称であり、文部科学省の委託事業として、全国高等専修学校協会に加盟する全国の高等専修学校と連携して実施している。

全国の高等専修学校には、中学校まで不登校であった生徒、発達障害のある生徒、家庭環境に課題を抱えている生徒、外国籍の生徒など多種多様な生徒が在籍している。その中で、そのような生徒たちが興味を持って学校に通うことができるように現場実習や地域・産学連携事業など各校が普通高校とは異なる、実践的で特色ある職業教育を行っている。そして、特に地元で中核的に活躍できる人材の育成を目指している。

本校においても、各専攻の生徒達が、外部実習を行ったり、地域や企業と連携した様々な事業を実施することで、より専門的な知識、実践的なスキルを養い、地元で就職に繋げている例がある。全国の高等専修学校で行われている特色ある教育や地域、企業連携の現状を調査し、各地域における高等専修学校の役割の確認と、認知度の向上を図ることを本事業の目的とする。

中学校の校長会や地域・企業の関係者と意見交換を行い、今後のより良い連携方法を模索して本校の地域連携、企業連携における課題点をまとめ、実施委員会に報告することを当会議の目的とする。

2．委員会実施概要

実施日時：令和５年１月25日（水）　15：00 ～ 16：30（1 時間 30 分）

会議次第

1．開会
2．ごあいさつ（学校法人さくら学園理事長　岩瀬 せつ子）
3．出席者自己紹介
4．内容説明・意見交換
　（1）事業の概要
　（2）意見交換（高等専修学校の実状）
　（3）意見交換（本校の教育内容、地域・産学連携）
　（4）意見交換（NPO との連携事例～カンボジアの小学生にお菓子を届ける～）
5．閉会

参加委員

中野渡委員：岡崎市立城北中学校校長。岡崎市の校長会長、愛知県の校長会の常任委員を兼務している。

香村委員：安城市立東山中学校校長。東山中学校は本校に近いため、多くの卒業生が本校に入学してきている。

佐野委員：刈谷市立朝日中学校校長。中野渡先生と同じく、愛知県の校長会の常任委員。本年度、子ども科学教育研究全国大会実行委員長。

石川委員：西尾市立東部中学校校長。東部中学校の生徒の中には、地域連携事業、企業事業の中心となって活躍している生徒が多くいる（パティシエ専攻）。

藤本委員：本校の地域連携事業の連携先責任者。NPO ではキャリア教育、社会教育の一環として大学や高等学校を中心に学校と地域を結ぶような事業を実施している。本校でも様々な連携事業を行っている。本会議で紹介するカンボジアでの企業連携事業の責任者。

落合委員：本校の進路指導部長。管理栄養士。調理師科の教員として調理師専攻、パティシエ専攻の地域連携、企業連携事業において取り纏めを行い、連携先との窓口となっている。

河口委員：本校のパティシエ専攻主任、製菓衛生士。調理師専攻やパティシエ専攻の地域や企業との連携事業において、メニュー開発や製造側の生徒指導の中心を担う。

岩瀬委員：学校法人さくら学園理事長。本分科会の統括責任者。

宮治委員：当会議の事務局。司会進行。報告書作成を行う。

3．はじめに

お忙しい時期に、また雪が降る悪天候の中お越しいただいたことに感謝申し上げる。

本校は2015年度から3年間当委託事業の幹事校として、介護の分野に特化し、アンケートによって地域の介護施設や介護福祉士養成校の声を集め、その結果を反映したカリキュラムの構成や実習システムの構築を行ってきた。また、2018年度からは現在のような形で全国の高等専修学校と連携し、高等専修学校の特色ある教育、地域連携、企業連携の事例の収集や高等専修学校の地域における役割の再構築、認知度の向上を図るために事業を行ってきた。昨年度は本校においても新型コロナウイルスの蔓延が深刻であったため、会議を行うことができなかったが、本年度このような形で委員の先生方にお越し頂いて会議を開催できることを大変嬉しく思う。

本校を含めた高等専修学校には多様な生徒が在籍しているが、それぞれの生徒がはっきりと目標をもって学校に通うことができている。進路に関しても、介護に興味のある生徒は介護の分野に、調理に興味のある生徒は調理の分野に就職ができつつある。中学校の先生方はお送りいただいている生徒の状況をよくご存じかと思うが、その子たちはそれぞれ何か光るものを必ず持っているはずなので、それを引っ張り出すことが本校の使命だと考えている。今回の地域連携事業、企業連携事業に挑戦しているパティシエ専攻の生徒も成績が高いわけではないが、気持ちはとても優しい生徒が多いので、様々な地域連携の場でどのようにしたら相手の方々が喜ぶかを真剣に考えて取り組めたのではないかと思う。

まだまだ、地域連携事業、企業連携事業は共に発展途上であると思う。中学校の先生方、実際に事業に関わって頂いた方々から意見を聞かせていただき、今後どういった形で内容を発展させていくかを検討していきたいと考えている。また、事業の内容を積極的に外部に発信していくことで高等専修学校の認知度を高めていくこと、高等専修学校のサポーターとなっていただける地域や企業の方々が増えることに繋がれば大変嬉しく思う。本日は短い時間ではあるが、活発な意見交換の場になれば大変ありがたく思う。改めて、お忙しい中参加していただいたことに感謝申し上げる（岩瀬）。

4．事業の概要

本事業は「専修学校による地域産業中核的人材養成事業（学びのセーフティーネット機能の充実強化）」という名称であり、文部科学省の委託事業として、2018年度より全国の高等専修学校と連携して実施している。

本校を含めた全国の高等専修学校には、不登校の生徒、発達障害のある生徒、家庭環境に恵まれない生徒、外国籍の生徒など多様な生徒が在籍し、そのような多様な生徒が同じ環境で学ぶ「インクルーシブ教育」を行っている。通学をするのが難しい生徒、勉強が苦手な生徒が多いため、学外での実習や地域・企業連携事業など、生徒が興味を示すことができそうな様々な特色ある教育を実施しているのが現状である。

本事業では、全国の高等専修学校で実施されているこのような連携事業の現状、特色のある教育の現状を調査すること、地域連携や企業連携で得られた効果やエピソードの収集を行うことで、高等専修学校の地域における役割を再確認し、またその認知度を向上させ、高等専修学校の生徒が卒業後に地域の中核的人材として活躍できるように学校運営を改善していくための機会とすることが事業の目的である。そのため関係機関の方々と会議を行い、貴重なご意見をいただく場を設けたいと考えている。

事業には、全国の大学、高等専修学校、業界団体、行政機関等が参加しており、本日はその中で中学校の校長会の先生方、連携先の地域・企業の担当者様にお越しいただいた。全国１２か所の高等専修学校で同様

に会議を行って、意見を徴収し、取り纏めて実施委員会に報告を行う予定である。地域連携、企業連携の内容だけではなく、日頃から委員の皆様が高等専修学校に対して抱いているご意見、ご感想、アドバイス、ご質問等を広くいただければ幸いに思う。ご意見いただいた内容を本校の教育内容にフィードバックして地域で活躍できる人材の輩出に繋げていきたいと思う。また、本会議を通して高等専修学校の魅力が委員の先生方に伝わり、高等専修学校のサポーターになっていただければ大変嬉しく思う（宮治）。

5．意見交換（高等専修学校の実状）

「高等専修学校」について、まだ世間一般には広く認知されているとは言い難い状況である。本日お越しいただいた先生方はよく知っていただいているかと思うが、中学校においても若い先生方は認知してみえない方が多いのではないかと考える。簡単に高等専修学校の実状について、お話したいと思う。
高等専修学校は専門学校の高校生課程であり、中学校を卒業した生徒の進学先となる。普通高校や定時制高校とは異なり、高校の間から専門的な職業教育や実践的な学習を行い、特に地域で活躍する専門人材の育成を行っている。実際に就職する生徒のほとんどは地元の企業や施設で就職している。

次に高等専修学校に在籍している生徒の特徴の一例について述べる。

高等専修学校には多様な生徒が在籍している。全国高等専修学校協会が実施したアンケートの結果では、まず、住民税非課税世帯の生徒の割合が全体の21.9%（本校は15.0%）である。住民税非課税世帯とは概ね世帯年収が200万円以下の世帯である。普通高校と比較して、非常に高い割合である。

また、一人親、両親のいない家庭の生徒の割合はアンケートの結果によると、全体の29.4%（本校は26.3%）である。日本全体では、一人親の家庭、両親のいない家庭の割合は7%程度であるため、これも非常に高い割合であることが分かる。

中学校時代に不登校の生徒の割合は全体の24.9%（本校は8.6%）である。中学校全体では文科省の調査で不登校の生徒の割合がおよそ5%であり、その割合は増加傾向であることが分かる。その中の多くの生徒が進学先に高等専修学校を選んでいることが分かる。

次に発達障害のある生徒の割合は全体の13.4%（本校は9.9%）である。診断書の有無で判断が難しい面もあるが、全国の高校全体では2.2%であるため、高等専修学校の割合は非常に高いことが分かる。

最後に外国籍の生徒の割合は1.7%（本校は7.7%）とそれぞれ非常に高い割合を占めていることがわかる。この値は全国の高等専修学校で増加傾向である。本校の割合は7.7%と非常に高い値を示している。これは本校のある愛知県三河地域の地域性を強く反映していると思う。日本語が話せない生徒、書けない生徒、読めない生徒への対応が喫緊の課題となってきている。

このような多様な生徒に対して、全国の高等専修学校では、少人数のクラス編成や個別対応に充実化によって対応し、きめ細かいインクルーシブ教育を実現している。全国高等専修学校のアンケート調査によると、全国の高等専修学校での不登校の改善率は80%に上る。先ほども述べたが、実習や実技を重視し、生徒が興味を示すような教育や地域、企業連携を行っていることで、効果が出ているのではないかと考える。ただし、教員にかかる負担は非常に大きなものがあると思う（宮治）。

本校では外国籍の生徒の割合の増加が進んでいる。日本語を読んだり、話したり、書いたりするのが難しい生徒がたくさんいるため、対応に苦労している部分もあるが、放課後に日本語学習の補習の時間を設けて対応している（岩瀬）。

ここまでの内容に関して、①高等学校の認知度について、②本校に入学する生徒の中学校での状況について、③本校と中学校との接続、連携について、④多様な生徒への本校での対応について、といった観点からご意見、アドバイス等をいただければと思う（宮治）。

高等専修学校の認知度に関しては、本校の教員は中学校で１年間勤務経験をすれば、充分に認知するようになるのではないかと思う。新人１年目の先生に関しては、高等専修学校を知らない先生がほとんどだと思う。１年経験をすれば、中学校の中でもいろいろな場面で高等専修学校の名前が出ることがあるので自然と認知されていっているように感じる。中学校としては、貴校では多種多様な生徒に対して、うまく接していただいていることを把握している。不登校気味の生徒が高等専修学校に入学すると不登校が改善されている。特に保護者の評判が昔から非常に良い。

中学校もそうであるが、多様な生徒が増えると少人数対応、個別対応の機会が増えるが、通常の職員だけの対応では限界がある。外国籍の生徒の対応としては、中学校では語学指導員など、翻訳をしてくれる専門職の導入が少しずつ進んでいる。今後そのような対応を保護者が期待するような状況が出てくると思う。特に小学校でそのような流れができていたが、最近では中学校でも導入が進んでいる。中学校から突然日本にやってくる家庭も増えている。なかなかコミュニケーションをとることができないが、授業はどんどん進んでいく。従来の職員だけでできるだけ手厚く対応してもなかなか難しいため、語学指導員の導入の希望が今後増えてくるのではないかと思う。外国籍の生徒のトラブルも多い。ただ、現状どの市町村もそのような語学指導ができるような人材がいないことが問題であると思う。そのあたりの対応が今後は高等専修学校にも必要となってくるのではないかと考える（佐野）。

貴重なご意見に感謝したい。本校は現状、内部の職員で外国籍の生徒への対応を行っているが、今後の状況を踏まえて、語学指導員の導入を検討する必要があるのではないかと思う（岩瀬）。

資料で示されたデータの通り、家庭に問題があったり、様々な問題を抱えている生徒をたくさん受けて頂いている印象である。大変ありがたく感じている。
認知度については、本校では長く進路指導を行っている先生についてはよくわかっているが、最近新しく入った職員、経験の浅い職員に関しては、高等専修学校と「〇〇アカデミー」、「〇〇学院」といった名前の無認可の学校とを同じような学校であると認識している職員もいると思う。保護者の方も、そのような学校についてインターネットで見つけてきて、体験入学に行き、生徒が興味をもつようなやりたいことだけをやっている学校に惹かれて、そちらになびいてしまう印象をもっている。私はそのような傾向が危険だと思っている。高等専修学校は進路まで責任をもっていただいており、様々な面で違うのであるが、そのあたりがうまく保護者に伝わっていないと思う。危険な時期にきているのではないかと個人的には思っている。連携事例として、ありがたいと思っているのは、貴校に入学した生徒が入学後に出身の中学校に来て、高等専修学校での状況を話してくれる機会がある。その時の生徒の表情がとても良いので、安心して送ることができる（石川）。

安城市内で子ども達の未来を支えて頂いている施設だと認識しており、充分職員や保護者に周知をさせていただいている。高等専修学校を卒業した生徒がどのような会社、施設に就職して活躍しているかという部分を中学校に展開していただき、中学校の方から保護者にどんどん伝えていく必要があるのではないかと考えている。様々な生徒への対応という部分で、感動的な資料を目にした。貴校を卒業し、大企業の特例子会社に障害者雇用として就職された生徒の資料である。就職に至るまでのきめ細かい指導の様子などが非常によく伝わってきた。多種多様な問題を抱えている生徒がどこで学ぶのか、どのようにして社会と繋がりを持つのか、とても難しい課題であるが、そういった部分に関していつも支援をいただいていることに改めて感謝申し上げる（香村）。

大企業や地元企業の特例子会社に就職する生徒も毎年、一定数存在する。そのような生徒の就職活動に関しては進路指導と保護者が充分に連携をとって進めている（落合）。

現在中学校における１番の課題は長期欠席、不登校の生徒がいろいろと努力をしても減っていかないことである。岡崎市は今年で３年目になるが、校内のフリースクールを設置した。保護者の方、地域の方、生徒達にもフリースクールの意義を説明し、学校に来れない生徒、教室に入れない生徒の居場所作りを進めているが、中学校の場合にネックになること、保護者の方が１番気にすることは、「その後の進学はどうなるのか」ということである。フリースクールで自分なりのカリキュラムで勉強するのは良いが、内申点はどうしても下がってしまう。そのような生徒は、なかなか全日制の高校に通うのは難しいような状況にある。そういったときに貴校のような学校を紹介し、そのような学校に進むことができるという話を保護者にすると、とても保護者が安心する。「それならばフリースクールに通う」と話をする保護者もいる。このような生徒を含めた様々な生徒を受け入れていただいているが、そのような生徒の数はしばらく減らないと思う。日頃からのご協力に感謝している（中野渡）。

勉強は小学校からずっと繋がっているが、専門教科は本校に入学すると０から始めるので、努力次第でいくらでも伸びていくことができると思う。それが高等専修学校の強みではないかと思う。本校に入学してくる生徒は、中学校までの成績が良い生徒ほど良い結果を残すかというとそうではないと思う。専門教科で活躍するセンスは学力に比例しない。それを引っ張り出すのが本校の使命だと思う。ただ、学校に来ないことには始まらないので、できるだけ生徒が興味をもつ事業を行って、中学校まで苦労した生徒が高校生デビューできるように尽力していきたい（岩瀬）。

６．意見交換（本校の教育内容、地域・産学連携）

地域連携、企業連携のお話に進む前に、本校の科の構成について説明したい。本校は、ファッション・パティシエ科、保育・医療福祉科、調理師科があり、それぞれ専門的な分野の学習を行っている。保育・医療福祉科は 2020 年度、調理師科は 2019 年度より、男子生徒の受け入れを始めている。ファッション・パティシエ科は２年次より、ファッション専攻とパティシエ専攻に、保育・医療福祉科は２年次より保育専攻と医療福祉専攻に分かれる。それぞれの専攻が２年次、３年次に地域連携との連携事業や企業との連携事業を行い、その経験を専門職での就職に繋げている。また、2023 年度より、美容師科を設置予定である。美容師科においても、地域連携や企業連携を行っていく予定である（宮治）。

美容師科については、地域の美容師業界が慢性的な人員不足であり、美容師の養成を期待する声がたくさん集まったため、開設するに至った（岩瀬）。

各専攻について、地域との連携事業や、企業との連携事業の状況を中心に各専攻の内容を紹介していく。まず、ファッション専攻は、ファッションデザイナーやアパレルの販売員等を目指す専攻である。授業の約半分はファッションの専門的な授業であり、また、その半分が被服の制作の授業である。たくさんの作品を制作し、学園祭や学内外のファッションショーに出演する。県や市など外部のファッションイベントにも多数参画している。先日は、愛・地球博記念公園モリコロパークや安城市の複合施設であるアンフォーレでのイベントに招待していただき、ファッションショーを行った。また、中学校との連携ということで、学園祭時に中学生からファッションイラスト画を募集し、入賞作品を本校の生徒が制作し、学園祭や外部のファッションショーで披露している（宮治）。

パティシエ専攻は、製菓衛生師になることを目指す専攻である。製菓の実習やカフェ実習など、実習が豊富なカリキュラムとなっている。実際に現場で活躍していたプロのパティシエ教員から実技を学ぶことができる。製菓衛生師の国家資格には在学中にチャレンジすることができる。

また、外部イベントにおいてお菓子やパンの販売の機会が充実しているのも本専攻の特徴である。製菓実習室は「菓子製造業許可」を取得しており、学内外の様々な場面で手作りのお菓子を販売することができる。本年度は、安城市のふるさと納税の返礼品に採用されたり、町内のクリスマス会でお菓子を提供したり、安城市の様々なイベントに出店し、地域や企業と連携してお菓子やパンなどの販売事業を行った（河口）。

保育専攻は、高等専修学校を卒業するだけでは保育士資格を取得することができないが、系列の慈恵福祉保育専門学校と連携し、即戦力となる保育士を養成できるような継続したカリキュラムを採用している。本校の系列には認定こども園が４つ、保育所が１つあり、現場実習を行うことができる。また、保育専攻においても、地域連携事業を行っており、町内で子ども向けのイベントを開催したり、幼児用の衣装を制作して、園児とともに学内外のファッションショーに参画したりしている（宮治）。

医療福祉専攻は 2020 年度より共学となり、男子の募集を開始した。医療福祉専攻は学内外の介護施設での現場実習が非常に多く、現場を意識した職業教育を行っている。地域の介護施設との連携体制が確立できており、地域の介護施設との間で独自の奨学金制度を設けている。また、社会福祉協議会や地域の団体と連携して、様々なイベントでボランティア等を実施している。また、「介護専攻」から「医療福祉専攻」に変わって以降、病院やスポーツジムなど、介護職以外での就職を希望する生徒にも対応した実習システムを構築している（宮治）。

調理師専攻は、調理師の養成校となっており、卒業時に調理師免許を取得することができる。また、希望者は製菓衛生師の資格にも挑戦することができる。調理師専攻の教員もパティシエ専攻と同様に現場で活躍していたプロの教員や講師が多い。調理師専攻では、地元の有名なレストランやホテルなどで現場実習を行っている。実践的なスキルを勉強するとともに、就職にも繋がっている。

調理師専攻においても、外部と連携してイベント等に出店する機会が多い。近年では、名古屋三越で高校生レストランを行ったり、安城市役所の食堂で高校生レストランを行ったり、企業と連携してお弁当の製造販売を行うなど、企業や地域との連携事業を積極的に進めている。調理師科の生徒はほとんどの生徒が調理等の専門職に就職している（落合）。

本校は 2023 年度より、美容師専攻を開設する。美容師養成校は高等専修学校在籍中に美容師国家試験を受験することができる。県内の高等専修学校で美容師養成校となっているのは２校目であり、三河地域では初めてである。ヘアに関する授業だけでなく、メイク、ネイル、まつげエクステなど美容に関する様々な内容を学習することができる専攻である。外部美容室での現場実習も予定している。また、外部美容室と連携した事業を実施予定である（宮治）。

本校の 2021 年度の進路決定率は 95.9%であり、これは全国の全日制高校の平均が 95.6%、定時制高校の平均が 84.1%、通信制高校の平均が 67.7%である現状から考えると高い率を保っていると言える。
約半数が就職、残りの半数が専門学校等への進学であり、就職先としては、各専攻で学んだ内容を生かせるような専門職への就職事例が増えてきている。特に、前述したような地域連携事業、企業連携事業を経験した生徒は、地元の実習先や連携先での就職を希望する例も多く、企業連携、地域連携事業が専門職としての就職へのモチベーションの向上に繋がっていることが分かる（落合）。

本校の生徒はコミュニケーションの能力が低い生徒が多い。自分に自信がない生徒が多いが、地域連携事業や企業連携事業で声を出して販売等を行うことが自信に繋がって、就職の成功に繋がってるのではないか

と考える。特に自分が学習してきた専門的な分野の就職を希望する生徒が多くなってきていることは非常に喜ばしいことであると考える（岩瀬）。

コミュニケーション能力は低いが、外部との連携を通していろいろな方と接する機会が増えることで、外部の方々と話をしたり、自分を認めてもらうことが自信に繋がっているのではないかと考える（落合）。

私も生徒と一緒に販売等の現場に立つことがあるが、最初は声が出ない生徒も最後の方には大きな声で声掛けをできるようになっているように思う。いろいろなところで外部に出すことが生徒の成長に繋がっているのではないかと思う。ただ、外部に出す際には、出す前にある程度の事ができるように学内で訓練を行わなければいけない。課題を抱えた生徒が多いが、いきなり無責任に外部に出すことはしない。まずは形を作って、基本を覚えてから外部に出すように意識している。それが、生徒が外に出た際に、教員が予想していた以上の結果を出してくれることに繋がっているのではないかと考える。
中学校でも「お仕事体験」のような時間がある際には声をかけてほしい。近隣の市の中学校に本校の専門教科を受け持つ教員を派遣して授業を行うことも行ってきている。たくさんの職種の専門教員がいるため、対応できるのではないかと思う。中学校のうちから仕事に触れることが重要ではないかと考える。コロナ禍で中学生の外部と触れ合う機会が減っていると思うので、良い機会になるのではないかと思う（岩瀬）。

ここまで本校の教育内容と地域・企業連携の現状に関して、紹介させていただいた。委員の先生方から広くご意見をいただきたい。高等専修学校の教育内容に求めること、必要だと思うこと、ご感想、ご質問や地域連携、企業連携に関するご意見など、どのようなことでも良いのでアドバイス等をいただければ幸いに思う（宮治）。

本当に熱心に活動されていることがよくわかる。本校の現状としては、ボランティア活動は１年生の時から比較的地域から要望があって、コロナ禍で少し減ったが最盛期だと年間１００個くらいの事業を行っていた。中学校でもそういった機会が増えているので、ボランティアで活動することを意欲的に行うベースはできていると言える。中学２年次には職場体験実習という時間がある。３日程度ではあるが、そこで初めて企業と少し繋がって「働く」ということに対して、イメージができてくる。それによって短期間ではあるが、様々な学習に対して意欲が高まる生徒が出てくる。そういったベースはあるので、どんどん積極的に地域連携事業、企業連携事業を進めて頂ければ良いと思う。ただ、連携してくれる企業を探すのが非常に大変ではないかと考える。中学校でも職場体験を行う企業を探すことには苦労している。貴校ではたくさんの企業連携に参加されているので、先生方は大変だと思うが、一度きりではなくて繰り返し声がかかるということはしっかりと連携事業において結果を残しているのだと思う。そういった意味で素晴らしいと思う（佐野）。

各専攻において、多数の連携事業を行っており、生徒たちは幸せだと思う。本校ではコロナの関係で２年生の職場体験は２年間実施できていない。来年度は実施しようと動き出しているが、できなかった分、地域の企業の方に来ていただいたり、「職業人と語る会」のような形で講演を行っていただいたりしている。貴校のプロの教員の方々に来ていただく機会ができたら非常に嬉しく思う。
地域の介護施設と連携していることは強みであると思う。異年齢の方や障害をもった方など様々な方と交流できることもとても良いことだと思う。例えば、美容師科の生徒が介護施設で利用者の方のヘアカットを行ったりすると、とても喜ばれるのではないかと思う（石川）。

本校の敷地の中にはデイサービスがあるが、そこで本校の生徒がネイルを行ったり、パティシエ専攻の生徒がお菓子を提供したりすると利用者の方が非常に喜ばれる。そういった機会を増やしていきたいと思う（岩

瀬)。

自分の存在価値を感じるときはいつだろうと考えると、社会に貢献できた、そんな実感を覚えた時ではないかと考える。義務教育の課程の中でそれがどれだけ実践できるかと考えるとなかなか現場との接点が少ないため難しいのではないかと考える。貴校のように企業と連携して、誰かの役に立って、「ありがとう」とたくさん言ってもらえる機会を作ること、「すごかったね」、「えらかったね」と認めてもらえる、そういったことが次の一歩を踏み出す子どもたちの勇気に繋がるのではないかと考える。安城市の中学校も職業体験はコロナで実施できていないが、来年度から再開する見込みである。１年生では職業講話会を行い、企業の方の講話を聞き、２年次に職業体験を行うといった流れができてしまっているが、少しはみ出して新しい事業を行いたいとも考えている。その際には声をかけさせていただきたいと思う（香村)。

積極的に協力させて頂きたいと思う。ともに連携して職業教育を行っていくことが重要であると考える（岩瀬)。

職場体験にいくと生徒はとても良い表情で戻ってくる、自信をつけて戻ってくるので、たくさんの外部の人達と接することは子どもたちとって非常に貴重な経験になっているのではないかと考える。中学校では、職場体験の体験先は生徒の希望を聞いて分配しているが、必ずしもすべての生徒が第１希望となるとは限らない。希望が叶わなかった生徒は、最初は嫌そうな顔で職場体験に出発するが、実際に行くととても良い顔で帰ってくる。どういう形であれ外部の方と接して、そこでいろいろな経験を学べるのはとても貴重であると感じている。これからもこのような事業を続けていただければ、子ども達にとっては良い財産ができるのではないかと思う。

教育内容に求めることであるが、男子生徒の募集が始まったことをとてもありがたく思っている。本校でもジェンダー平等という部分を可能な限り進めている状況であるので、男子生徒もたくさんとっていただければ救われる生徒が多いのではないかと考える（中野渡)。

男子の募集を始めて以降、今のところ、まじめでおとなしく優しい生徒をたくさん送って頂いているように思う。これからも対象を広げていけるように努力していきたい（岩瀬)。

ＮＰＯの事業で概ね１年間で２、３０名ほどの学生のインターンに関わっている。知多半島、西三河、豊田市の学生が多い。インターンのため、企業連携や地域連携と同じように事業を行っているが、その中で狙いをどこに持っていくかという部分が重要であると考える。単純にボランティアで終わってしまうと、自己満足になってしまうように感じる。行政の事業の場合は、継続することが目的になってしまっていることが多い。本来は課題解決が目的であるはずであるが、少し目標がずれることがよくあると思う。今回の安城生活福祉高等専修学校のカンボジアの事業もそうであるが、単純にボランティアで終わらないという目標設定をするということが重要であると考える。具体的には、働くということに対する意識づけをしたいと考えていた。どんな仕事でも対象となる人がいる。その対象となる人の困りごとを解決する、支援するというところが仕事の本来の目的であると考えるので、誰に何をどうしたらいい、という部分を常に意識させて事業を行っている。なかなか難しいことではあるが、対象や目的がはっきりしていないと高校生の学びが浅くなってしまうように感じるので、今回の連携事業においてはそのようなあたりを強く意識した。学校だけであるとリソースがなかったりするので、企業やNPO、市民団体と連携する価値はそのあたりにあるのではないかと考える（藤本)。

本校も現場実習をたくさん行っている。現場実習に行かなくても、資格は取ることができるが意図的に実習の時間を多くしている。そして、体験をしたら体験だけで済ませずに、そのあとに実習体験発表会を行う。

全ての生徒が１００人ほどの前で実習成果の発表をする。人前で話すのが苦手な生徒が多いが、繰り返すうちに本校の生徒も上手に話をすることができるようになる。それも大きな体験の１つではないかと思う。自信に繋がるのではないかと考える（岩瀬）。

７．意見交換（NPO との連携事例～カンボジアの小学生にお菓子を届ける～）

本校では、教育 NPO Seven Swell 様と様々な連携をさせていただいている。本日はその中で、2020 年度より実施している、カンボジアの小学生にお菓子を届ける事業に関して紹介させていただき、委員の先生方より意見をいただきたいと思う。

連携先の NPO「NOM POPOK」はカンボジアで子ども達の栄養改善を目的として、小学校などにお菓子を提供している NPO である。NOM POPOK はお菓子を提供するだけでなく、カンボジアの子ども達に栄養に関する授業を行っている。

カンボジアは小学校の授業時間が１日２、３時間しかなく、国語、算数、社会の３教科しか学習しない。日本でいう家庭科の時間が無く、家庭科の中で学ぶような食材や栄養に関する内容を学習していないため、カンボジアの子どもだけでなく、大人もそのような知識を持っていない。そのため、食が偏っていたり、栄養に関して課題を抱えている部分が多い。そのような状況を改善するために活動しているのが、NOM POPOK である。

NOM POPOK は栄養改善を目的とした団体であるため、お菓子をつくる専門性が無い。レパートリーが少なく、子どもにうけるような可愛いお菓子をつくることができていないという部分が NOM POPOK が抱える課題である。そこで、そのような課題に対して、安城生活福祉高等専修学校の生徒とともに取り組んで解決できないかと考え、事業を提案した。最終的には、安城生活福祉高等専修学校の生徒がレシピを考案し、NOM POPOK の抱える課題を改善できるような新しいお菓子をカンボジアの小学校に届けることが事業の目的である（藤本）。

ここまでの事業の流れを説明させていただく。事業は２期に分かれて実施しており、第１期では蒸しパンを提供した。まず、2020 年の 10 月に現地で実際に提供されているお菓子のレシピを送って頂き、日本の材料で再現を行った。蒸しパンと焼きドーナッツを再現した。日本では手に入りにくい材料等もあり、なかなか現地と同じように再現するのは難しかったようだ（宮治）。

材料の違いが大きくて苦労したが、生徒も現地の食材の特徴と違いを理解し、それをもとに試行錯誤して検討を進めることができた。通常の授業では経験できないような、良い経験ができたのではないかと考える（河口）。

その後、１回目の WEB 会議を行った。藤本様と NOM POPOK の担当者様より、カンボジアの社会課題やレシピ提案に向けての要望、アドバイスをいただき、質疑応答などを行った。

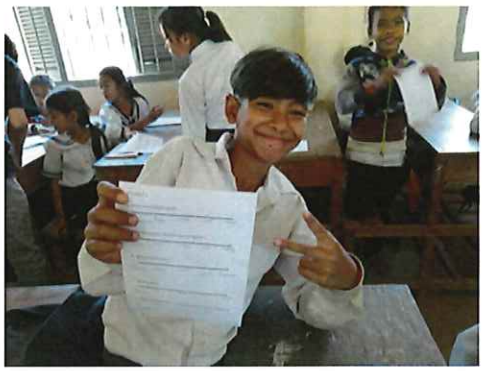
その後、本校の生徒はそれぞれがレシピの検討を進めた。何度も繰り返して、グループでレシピの検討を進めた。

2020 年 11 月に２回目の WEB 会議を行い、生徒よりレシピの提案を行った。焼きドーナッツ、カボチャ蒸しパン、バナナ蒸しパンを提案した。その後、12 月にカンボジア現地において、NOMPOPOK の担当者の方でお菓子の試作と現地の嗜好に合わせた改良が進められた。

そして、2021 年１月にカンボジアの小学生約 400 名に対して、実際に蒸しパンを提供した。その後、お菓子を提供したカンボジアの小学生にお菓子の評価アンケートを実施して頂いた。　アンケートの結果は良好で、カンボジアの小学生の多くが、「おいしい」と回答してくれた。

この結果を踏まえて、2021 年３月に WEB 会議の形で成果報告会を実施した。カンボジアで実際にお菓

子を提供した様子や評価アンケートの結果、現地の小学生からのコメントなどを本校の生徒に展開した。生徒からは、「カンボジアと日本の食文化の違いや使用している材料の違いに苦戦したが、最終的に納得のいくものが作れたので嬉しかった。」　、　「カンボジアの子ども達が美味しそうに食べている写真やアンケートの結果を聞いて感動した。大変だったけどやって良かったと思う。」といった感想が挙がった。また、「日本で実際に自分たちが作ったお菓子をカンボジアのみんなに食べて欲しい」といった要望も挙がった（宮治）。



「自分たちの作ったお菓子をカンボジアの子どもたちに食べてほしい」という声が多数挙がったため、第２期の事業では、日本で製造したお菓子をカンボジアに空輸することを目標とした。

2021 年６月に前回とは別の学年のパティシエ専攻の生徒を対象に事業を開始した。まず、1 回目の WEB 会議を行い、今回開発を希望するお菓子について、NOM POPOK の担当者より説明をして頂いた。その後、生徒からの質疑を行い、第２期の対象となるお菓子が「大豆バー」、「かりんとう」などの日持ちのできるお菓子、栄養面にも配慮したお菓子に決定した。

その後、生徒たちは今回のテーマに沿ったお菓子のレシピを繰り返し検討した。そして、７月に２度目の WEB 会議を行い、生徒が自分たちで考えてきたオリジナルのお菓子を提案し、藤本様、NOMPOPOK 担当者様よりご意見をいただいた。そして、カンボジアに届けるお菓子の方向性が決定した。

その後、2021 年７月から 10 月の間に WEB 会議で決定したお菓子について、レシピの検討と試作を重ね、実際にカンボジアに送る商品のレシピを決定した。

そして 11 月の WEB 会議で実際に発送する商品の説明を行った。今回対象とする小学校やスケジュールの確認を行った。

11 月から１月にかけて、お菓子の発送に向けて、ラッピングやオリジナルのシールの検討を行い、かりんとうと大豆バーをカンボジアに空輸した。その後、2022 年１月に現地でお菓子の提供を行い、第１期と同様に評価アンケートを実施した。

その後、2022 年５月に成果報告会を行った。カンボジアで実際に提供した様子のフィードバックや評価アンケートの結果などを生徒に説明した。また、現地の小学生より頂いたビデオメッセージを生徒に展開した。生徒からは、「国境を越えて、自分たちの作ったかりんとうが、カンボジアの子ども達の手に渡って、食べてもらえたということが嬉しかった。」、「栄養を考えて作るという貴重な体験をさせてもらえたと思

う。」、「私たちが美味しくてもカンボジアの子どもが美味しくなかったら意味が無いので、現地の砂糖などを使って作るのが難しかった。でも、おいしいと食べてくれたので達成感を感じた。」といった感想が聞かれた。生徒と一緒に事業を進めた河口先生より一言頂きたい（宮治）。

まずは蒸しパンがテーマとなり、生徒もどのようなものが栄養的にも良いかをそれぞれ考えて実施した。カボチャ、アボカドなど様々なアイデアを自分たちで考えた。実現しなかったレシピもあるが、テーマを決めて試作を重ねた経験は良かったのではないかと考える。検討を進めていくうちに、材料の違いや嗜好の違いなどの壁にぶつかったが、新しい発見があってよかったのではないかと考える。
学内だけではできない様々な経験をすることができた。自分が良いだけではなく、対象となる人達が喜ぶものを作るというのは普段の授業では学べないので良い機会となったのではないかと思う。道具の違いもあった。オーブンなども日本とカンボジアでは異なる。そのあたりも勉強になったのではないかと考える（河口）。

ここまでが本校が本年度までに実施したカンボジアのNPO法人NOM POPOKとの連携事業に関するご紹介である。当事業に関するご意見、ご感想、アドバイス等いただければと思う（宮治）。

素晴らしい取り組みであると思う。今後どのように事業を展開していくのか、海外と繋がっていくのか、どんな地域の人と繋がっていくのか楽しみである。とにかく外へ出ていくという姿勢がとても大切であると思う。このような事業を今後も継続して実施していくことを強く期待したい（佐野）。

佐野先生と全く同感である。素晴らしい取り組みであると思う。これからも中学校、企業、NPOなどととうまく連携して頂いて、生徒が成長できるような機会を増やしてほしいと思う。高等専修学校の現状や事業の様子が理解できて、本日は非常にありがたい機会であった（石川）。

国際感覚を身に付ける、日本人としてのアイデンティティを感じる、そういった観点からもとても良い事業であると思う。日本の味はこのようなもので、相手の国の文化はこのようなものでということをリアルに感じることができる取り組みは他にはないと思う。非常に素晴らしい事業であると思う。是非今後も続けて頂きたい（香村）。
現在入試のシーズンで、面接練習に関わることがあるが、子ども達に最近気になるニュースを聞くとウクライナとロシアの戦争や春節、中国のコロナ政策など、世界に目を向けている子がたくさんいて驚いている。やはり、中高生にこのような機会を提供するということは、様々なことを考えるきっかけとなり、視野を広げることに繋がると思う。本当に素晴らしい事業であると思う。今後継続される際には状況を中学校にも展開して頂ければと思う（中野渡）。

2020年度の事業より関わらせていただいているが、コロナの影響もありいろいろと大変であったが、生徒の様子を1年間関わって見ることができるのは、今までの事業ではあまりないことだったので、「この子は話せるようになった」など生徒の成長する姿を見ることができて良かったと思う。また、少し生徒の皆さんの視野も広がったのではないかと思うので、事業として本当にやってよかったと思う（藤本）。

8．おわりに

本日は入試が近くお忙しい中お越しいただき、感謝申し上げる。このような形で委員の皆様にご助言頂いたことを今後の運営に生かしていき、生徒が実習に行ったり、外部との接点を持ちながら活躍できる場面をたくさん作っていきたいと思う。本校だけでは力不足の部分を藤本様のように外部から力を借りることができれば、生徒にとって本当に為になる教育ができるのではないかと思う。また、そのような事業を外部に積

極的に発信して、高等専修学校の認知度を高めることにも尽力していきたいと思う。最後に、高等専修学校のサポーターとしてご協力いただいている皆様に心より感謝申し上げる（岩瀬）。

【参考資料】

第１回地域振興分科会（愛知）パワーポイント資料

- 本日の内容 -

1．理事長ごあいさつ
2．出席者自己紹介
3．事業の概要
4．意見交換（高等専修学校の実状）
5．意見交換（本校の教育内容、地域・産学連携）
6．意見交換（NPOとの連携事例～カンボジアの小学生にお菓子を届ける～）

事業の概要

事業の概要

文部科学省委託事業

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
（学びのセーフティーネット機能の充実強化（調査研究））

高等専修学校

① 多様な生徒（不登校、発達障がい、家庭環境、外国籍）

② 特色ある教育（実習、地域・産学連携、※インクルーシブ教育）

※エクスクルーシブ（排除的）教育の対概念で、障害、人種、国籍、言語、宗教、貧困といった多様な理由により社会的に周縁化されやすい子どもとそうでない子どもとが地域の学校で「ともに学ぶ」教育のこと

・全国の高等専修学校で行われている地域連携、特色ある教育の現状調査

・各地域における高等専修学校の役割の確認、認知度の向上

▷ 関係機関との意見交換により、高等専修学校運営の課題点を把握

事業の概要

（事業参画団体）

【大学】
筑波大学、立命館大学大学院、慈恵医療科学大学

【高等専修学校】
大岡学園高等専修学校（兵庫：事務局）
磐城学芸専門学校（福島）
東放学園高等専修学校（東京）
安城生活福祉高等専修学校（愛知）
猪名川甲英高等学院（兵庫）
立修館高等専修学校（山口）
大育高等専修学校（沖縄）　等
北見商科高等専修学校（北海道）
細谷高等専修学校（茨城）
岩谷学園高等専修学校（神奈川）
大阪技能専門学校（大阪）
龍昇経理情報専門学校（徳島）
佐賀星生学園（佐賀）

【業界団体】
全国高等専修学校協会
中小企業家同友会全国協議会
NPO法人高等専修教育支援協会、
東京中小企業家同友会　等

【行政機関】
各都道府県私学教育課　教育委員会　中学校長会　公共職業安定所　等

【その他】
各地域での連携企業・団体　等

全国１２か所で分科会を実施

意見交換（高等専修学校の実状）

高等専修学校

高等専修学校とは？

専修学校（専門学校）の高校生課程

中学校 ⇒ 全日制高校 / 定時制高校 / 通信制高校 / 高等専修学校 ⇒ 大学 / 短期大学 / 専修学校 / 就職

高校の間から専門科目を中心に学習を行う

▶ **職業教育、実践的な学習（実習）**

▶ **地域で活躍する専門人材の育成**

生徒の特徴

高等専修学校の実態アンケート結果（R1年度）

① 住民税非課税世帯の割合：21.9%（本校は15.0%）

⇒ 住民税非課税世帯の年収は概ね200万円以下（会社員、専業主婦、子ども１人の場合）

② 一人親、両親のいない家庭：29.3%（本校は26.3%）

⇒ 日本全体では7.0%程度：厚労省 国民生活基礎調査より

③ 中学校時代に不登校の生徒：24.9%（本校は8.6%）

⇒ 中学校全体では5.0%程度：R3文科省 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題より

④ 発達障害のある生徒：13.4%（本校は9.9%）

⇒ 全国の高校全体では2.2%：平成21年度 文科省調査より

⑤ 外国籍の生徒：1.7%（本校は7.7%）

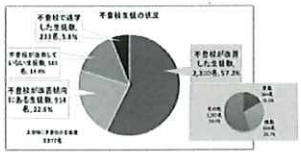
⇒ 全国的に増加傾向、全国の高校全体では0.5%：学校基本調査結果より算出

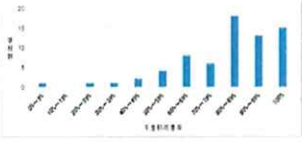
学校の対応

・少人数クラス編成、個別対応の充実化による、きめ細かいインクルーシブ教育の実施。

・実習、実技を重視した、手に職をつける教育。生徒の興味を促す教育 → 地域・企業連携

▶ 全国の高等専修学校での不登校の改善率は約80%
（下記グラフ：全国高等専修学校協会アンケート結果より）





下記のような事項に関しまして、ご意見、アドバイス、ご質問等頂けましたら幸いです。

・高等専修学校の認知度について

・本校に入学する生徒の中学校での状況について

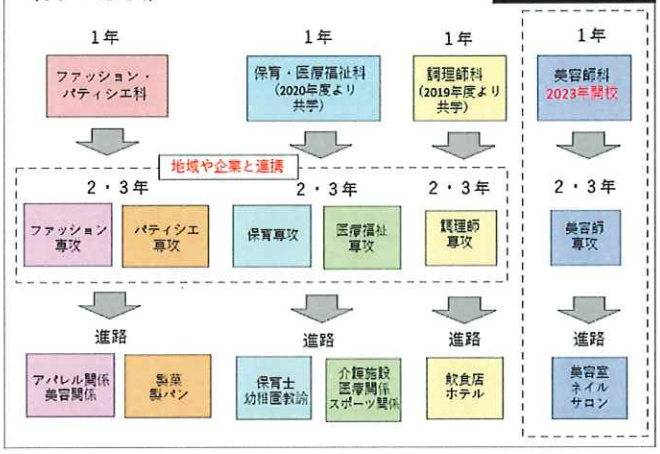
・本校と中学校との接続、連携について

・多様な生徒への本校での対応について

意見交換
（本校の教育内容、地域・産学連携）

本校の科の構成

（科と専攻）



ファッション専攻

教育内容、連携事業

あいち市町村フェア：ファッションショー
@愛・地球博記念公園モリコロパーク

ファッションショー@アンフォーレ

・授業の約半分はファッションの授業。その半分が制作の授業。

・学園祭やファッションショーにむけた作品づくりが中心。

・県や市など外部のファッションイベントに多数参画（地域連携）

【学園祭ファッションショー（中学校連携）】

教育内容、連携事業

中学生からテーマに沿ったファッションイラスト画を募集

▶ 入賞作品を本校の生徒が制作し、学園祭や外部イベントのファッションショーで披露

2022年度グランプリ作品：岩津中学校生徒
2022年度準グランプリ作品：竜南中学校生徒

パティシエ専攻

教育内容、連携事業

製菓実習

カフェ実習

校内での菓子販売
（定期販売、学園祭など）

- 製菓実習やカフェ実習など実習が豊富なカリキュラム
- 現場で活躍していたプロのパティシエ教員から学ぶ
- 製菓衛生師の資格（国家資格）に在学中にチャレンジ
- 外部イベントでの販売などの機会充実（企業・地域連携）

製菓実習室＝「菓子製造業許可」を取得

教育内容、連携事業

▶ 学外の様々な場面で手作りのお菓子を販売

安城市ふるさと納税返礼品に採用

町内会クリスマス会でお菓子の提供

安城市の様々なイベントお菓子販売

おとうふ工房いしかわ様との連携
（アンフォーレの店舗での継続販売）

保育専攻（2020年度より共学）

教育内容、連携事業

認定こども園での現場実習
の様子

町内のクリスマス会で子ども
向けのイベントを開催

外部ファッションショーへの
参画（航空自衛隊小牧基地）

- 系列の慈恵福祉保育専門学校と連携した、即戦力となる保育士を養成するためのカリキュラム
- 系列の認定こども園や保育所を利用した現場実習
- 地域で子ども向けのイベントを開催（地域連携）
- 幼児用衣装を制作して、園児とともに学内外のファッションショーに参画（地域連携）

医療福祉専攻（2020年度より共学）

教育内容、連携事業

学外の介護士施設での
現場実習

スポーツジムでの
現場実習

地域の様々なイベントでボ
ランティアを実施（七夕ま
つり、福祉まつりなど）

- 学内外の介護施設での現場実習の機会が非常に多い
- 地域の介護施設と連携した奨学金制度を創設（企業連携）
- 社協や地域と連携して様々なイベントでボランティア実施（地域連携）

調理師専攻（2019年度より共学）

教育内容、連携事業

学外での現場実習の様子
（ホテルグランドティアラ）

校内での販売
（学園祭など）

特別授業（陶芸）

- 卒業時に調理師免許を取得できる。製菓衛生師資格も取得可能
- 現場で活躍していたプロの教員、講師から学べる
- 地元の有名なレストランやホテルなどで現場実習を実施
- 外部と連携して、イベント等に出店機会多い（企業・地域連携）

【企業や地域との連携事例】

教育内容、連携事業

名古屋三越にて高校生レストラン開催

安城市役所食堂にて高校生レストラン開催

CAFÉアルクス様と連携：お弁当の製造販売

特別講義+実習（北京本店様）

美容師専攻（2023年度開校）

教育内容、連携事業

シャンプー台、ドレッサーを配備した実習室

マネキンを使ったヘアカットの授業

学外での現場実習

- 美容師養成校（在学中に美容師国家試験受験）
  - ▶ 県内の高等専修学校で２例目、三河地域初
- メイク、ネイル、まつエクなど美容に関する様々な内容を学習
- 外部美容室での現場実習を実施予定
- 美容室との連携した事業を多数実施予定（企業連携）

進路の状況

進路

2020年度：進路集計

2021年度：進路集計

▶ 本校の2021年度の進路決定率：94.9%

（参考：高校全国平均：95.6%、定時制高校：84.1%、通信制高校：67.7%）

（R1年文科省資料より）

就職先例（調理・製菓系）：平安閣、名鉄トヨタホテル、ホテルグランドティアラ、ロワジールホテル豊橋、パンのトラ、ナチュール、パティスリーアルピーノ、大正庵釜春、スウィーツガーデン、日本ゼネラルフード、日清医療食品、山崎製パン　等

下記のような事項に関しまして、ご意見、アドバイス
ご質問等頂けましたら幸いです。

- 高等専修学校の教育内容に求めること、必要だと思うこと、ご感想、ご質問
- 地域連携、企業連携事業に関するご意見
- このような科、専攻があったらいい

など

意見交換
（NPOとの連携事例：～カンボジアの小学生にお菓子を届ける～）

教育NPO Seven Swell様との連携

- 代表：　藤本 径也 様
  - ▶ 高校等で産学連携事業を行う

本校での特別授業の様子

（カンボジアのNPO「NOM POPOK」との連携）

- NOM POPOKはカンボジアで子どもたちの栄養改善を目的として、小学校等でお菓子の提供を行っているNPO

NOM POPOKが抱える課題

お菓子のレパートリーが少ない、子ども向けの可愛いものが無い、それらを作る専門性が無い

教育NPO Seven Swell様との連携

これらの課題に本校で製菓を学ぶ生徒が授業として取り組むことで、多様な人種と食材の理解など、学びになることが多いのではないか

本校の生徒がレシピを考案し、課題を改善できるような新しいお菓子をカンボジアの小学校に提供することが事業の目的

第１弾～蒸しパン～

① 2020年10月：現地レシピ再現

現地で提供されているお菓子のレシピを頂き、日本の材料で再現（蒸しパンや焼きドーナッツ）

＜藤本様、NOM POPOK担当者様による授業（WEB会議①）＞

カンボジアの社会課題について（栄養面）、レシピ提案に向けての要望、アドバイス、質疑応答

第１弾～蒸しパン～

② 2020年11月：WEB会議②

生徒よりレシピ提案（焼きドーナッツ、カボチャ蒸しパン、バナナ蒸しパン）

③ 2020年12月：試作

現地のNOMPOPOK担当者様の方で試作、現地の嗜好に合わせた改良

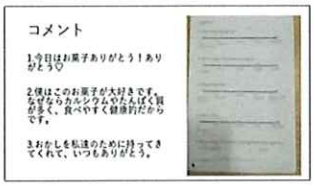
第１弾～蒸しパン～

④ 2021年1月：提供

カンボジアの小学生約400名に実際に蒸しパンを提供。
評価アンケートを実施。

第１弾～蒸しパン～

⑤ 2021年3月：成果報告会



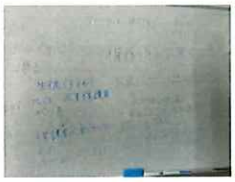
＜生徒の感想（抜粋）＞

- カンボジアと日本の食文化の違い、使用している材料の違いに苦戦した。最終的に納得のいくものが作れたので嬉しかった。
- カンボジアの子ども達が美味しそうに食べている写真やアンケートの結果を聞いて感動した。大変だったけどやって良かったと思う。
- 日本で実際に作ったお菓子をカンボジアのみんなに食べて欲しい

第２弾 ～大豆バー、かりんとう～

① 2021年6月：WEB会議①
本年度開発するお菓子の説明。
生徒からの質疑。

▶ 大豆バー、かりんとうなど
日持ちのできるお菓子。
栄養面にも配慮。
今回は日本で製造し空輸予定。

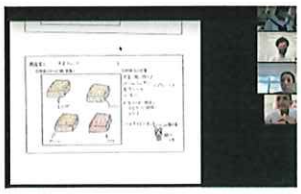


第２弾 ～大豆バー、かりんとう～

② 2021年7月：WEB会議②

生徒達が今回のテーマに沿って自分たちで考えてきたオリジナルのお菓子を提案。
藤本様、NOMPOPOK担当者様より意見をいただく。

▶ カンボジアに届けるお菓子の方向性決定



第２弾～大豆バー、かりんとう～

③ 2021年7月～10月：レシピの検討、試作

WEB会議で決定したお菓子について、レシピの検討と試作を重ね、実際にカンボジアに送る商品のレシピを決定する。

実際のレシピ

第２弾～大豆バー、かりんとう～

④ 2021年11月：WEB会議③

発送する商品の説明を行う。対象とする小学校やスケジュールの確認を行う。

⑤ 2021年11月～2022年1月：商品の発送

ラッピングやオリジナルのシールの検討を行い、かりんとう、大豆バーをカンボジアに空輸する

第２弾～大豆バー、かりんとう～

かりんとう

大豆バー

第２弾～大豆バー、かりんとう～

⑥ 2021年1月：現地でお菓子の提供、アンケート

第２弾～大豆バー、かりんとう～

⑦ 2022年5月

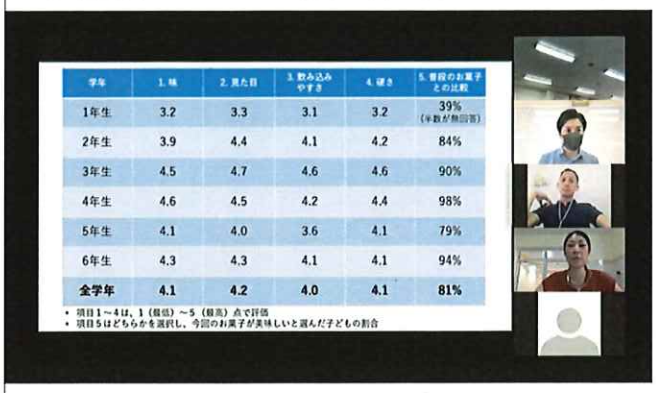
成果報告会

＜生徒の感想（抜粋）＞

・国境を越えて、私たちの作ったかりんとうがカンボジアの子ども達の手に渡って、食べてもらえたということが嬉しかった。また、栄養を考えて作るという貴重な体験をさせてもらえたと思う。

・私たちが美味しくてもカンボジアの子どもが美味しくなかったら意味が無いので、現地の砂糖などを使って作るのが難しかった。でも、おいしいと食べてくれたので達成感を感じた。

当事業に関するご意見、ご感想、アドバイス
ご質問等頂ければ、幸いに思います。

本日はお忙しい中、ありがとうございました。	<参考資料>アンケート結果（第１弾～蒸しパン～） 

学年	1. 味	2. 見た目	3. 飲み込みやすさ	4. 硬さ	5. 普段のお菓子との比較
1年生	3.2	3.3	3.1	3.2	39%（半数が無回答）
2年生	3.9	4.4	4.1	4.2	84%
3年生	4.5	4.7	4.6	4.6	90%
4年生	4.6	4.5	4.2	4.4	98%
5年生	4.1	4.0	3.6	4.1	79%
6年生	4.3	4.3	4.1	4.1	94%
全学年	**4.1**	**4.2**	**4.0**	**4.1**	**81%**

・項目１～４は、１（最低）～５（最高）点で評価
・項目５はどちらかを選択し、今回のお菓子が美味しいと選んだ子どもの割合

３－６　岡山県（担当校：中国デザイン専門学校）

文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
高等専修学校の学びの「セーフティーネット」
令和３年度　地域連携委員会（岡山地区）実施報告

開催校　中国デザイン専門学校

１．高等専修学校の説明

不登校の生徒　発達障害の生徒の受け入れの学校となっている、全体の集団教育に当てはまらない、個別対応が必要な生徒を受け入れる体制がある。

実務重視。専門課程の授業の基礎を教える。専門カリキュラムを組むことができる自由度がある。最近は専門分野を真面目に学びたいという生徒が増えてきた。大学受験をしている生徒もいる。良い傾向にある。岡山県には高等専修学校は２校しかなく、本校と自由高等学院のみ。中学校教員もまだ知らない人もいる。

２．本校の取り組み（授業環境の特色）

・企業との連携、実習、職場体験、ボランティア活動　・・・現代社会で実施
・クリエイターや団体代表者を招いての講演会
・少人数体制での実施
・習熟度別指導の実施　　生徒によってかなりの差がある。全ての生徒を取りこぼさないように。
・義務教育段階の未習熟な面での指導　　時計の読み方　メモリの読み方　計算などどこでつまづいているのかを知ってから指導する。
・専門技能に関する全国大会への参加　それぞれのレベルに合ったチャンスを与えている。
・生活指導　担任の業務としても大きい　このベースができないと授業ができない
・資格取得　ファッション販売検定　漢字検定　ビジネス能力検定など

本校は全日制で通信制とは違うが、彼らは通いやすくなっているのか？

3．最近の問題

起立性調節障害の生徒が年々増えている。

手帳は取りたいけど保護者が認めてくれない。記憶力とか努力で改善できるものではない。周囲がサポートをしていかないと苦しんでいる生徒は多い。

4．事例

第一高等学院　KTCの２校にフリースクールが学内に入ってカウンセリングをしていた。（村本）２時間で４人くらいの生徒が常に相談にきていた。本校が珍しいのは通信ではなく、全日制だということ。保護者からも通信制はないのかと聞かれるが、生徒たちは通いたいという気持ちがある。

5．通信制について

KTC　N校などに行った生徒もいるが、スクーリングの中で沖縄や大阪などに数泊する。そういった時に抵抗感があるらしい。通信でも通うことがある。通わないことで、人間関係形成が発達せずにいると、解決能力が身につかない。登校することで、場にいることで、空気感を感じることができる。自分が振る舞うべき次の行動を予測する能力が身につけることができる。

6．出口のところ

手帳を持っていないグレーの方が働ける環境を作る。NPOのユイさんと協力して補助金をもらって、就労体験事業を行う。実験的取り組み。最終的に行くつく問題は「雇用創出」。解決策として雇用創出となるが、お金の問題などで実現できないことが多い。就労体験をすれば、手帳が必要と感じれば取ることができる。もし一般就労でいけるとなればそうすれば良い。本人が気づくことが大切。

7．地域連携授業の説明

本校でもSDGSと絡めて企業連携の取り組みをやっている。スライドショーを使って取り組みを説明。

・地域清掃
・幼稚園ハンドメイド遊具デザイン
・チャリティサンタバースデーカード作成
・盲導犬グッズ作成
・岡山芸術交流ボランティアスタッフ参加
・山間地域の整備、LINEスタンプ作成

３年間で学内の授業以外での濃密な体験を積み重ねていくことで、対応力を身につける。働くための基礎力を育てる。専門課程の学生でも働きたくないという学生は多くいる。

学生が働くことに魅力を感じていない。恵まれているからこそ働くことに意味を見出さないといけなくなっている。

8．仕事について

ジブンワークスの仕事の内容の説明　　憧れる職業の事例

デザイン制作

お店を出店する上での仕事

結婚式場でのコーヒー出店

マルシェ

自己肯定感を養いながら、働く楽しさを育てていくことが大切。そのためにはどんどん新しい仕事を作っ

ていく。10年前になかった仕事もある。（YOU TUBERなど）新しいことをするためには、既存の壁を破っていかないといけない。そのためには立場の違う人たちがトライ＆エラーを行いながら探っていく。一度互いの機関を訪問をして、できることを探っていく。カリキュラムの中に組み込んで連携していく。

9．中学校教員に向けた高等専修学校認知度アンケートの報告

夏に中学校訪問を行ってアンケートをお願いした。８１校中２６校が回答。認知度は５０％くらい。希望者がいれば認知度が上がっている。就学支援金などお金の関係はほとんど認知されていない。高等専修学校＝不登校、大学受験資格が取れることは認知されていた。

本来はこの会議に中学校の先生が参加してくだされば、入口と出口のところで話ができたのではないかと思うが今回は叶わなかった。

10．今後について

仕事を作る。チャンスを作る。ということを互いに連携しながら作っていきたい。一人の生徒の成功事例ができると大きく変わる。

11．地域振興分科会について（実施状況報告）

・委員会のテーマ　　社会に彼らの居場所を作る。広げるためにできること。

・地域振興分科会委員メンバー

花田洋通	中国デザイン専門学校　基礎デザイン科　学科長
橋本典子	中国デザイン専門学校　基礎デザイン科　教員
村本和孝	志塾フリースクール岡山　理事長
登田成一	ジブンワーク　代表

・第１回　地域振興分科会　実施報告

実施概要

実施日時：2023年1月24日（火）　15:30～16:30

実施場所：中国デザイン専門学校　101ギャラリー

全体スケジュール

自己紹介（10分）

高等専修学校について（10分）

認知度アンケート報告（5分）

現在の地域連携の報告（5分）

社会に彼らの居場所を作る。広げるためにできること。（30分）

委員との意見交換

花田委員	高等専修学校が不登校、発達障がいの生徒を受け入れる体制ができていても社会に出た時に受け入れる器がなければ、意味がない。手帳を持っている人は支援の方法があるが、グレーの生徒たちのロードマップを作ってやる必要がある。
登田委員	ジブンワークでは就労支援Ｂ型事業所として活動を行っているが次年度からは他の団体と連携をしてグレーの人達を受け入れ、職業体験を行う予定。（給料も支給される）そこで手帳が必要と本人たちが気づけば申請を行う。必要がなければ一般就労を促す仕組みを作る。本人に気づきを与えることが目的。
村本委員	志塾フリースクールでは過去に５０００人以上の不登校生徒たちを見てきた。主に中学生から高校生がメインとなる。彼らの中には仕事に憧れを持つことができない。ジブンワークの取り組みではコーヒーショップやマルシェなどへの参加など若い人が憧れる要素が入っている。楽しみを感じれること。非常に画期的な取り組みだと思う。
橋本委員	ジブンワークは就労事業所。志塾フリースクール岡山は不登校支援。本校は教育機関ということでそれぞれが違う立場だからこそ連携すると新しい可能性が生まれるのではないか。学校のカリキュラムに２団体との関わりを授業として取り込んでいってトライアンドエラーを行っていきながら、新しい仕事の創出＝社会の居場所を作っていけたらという内容で話がまとまった。

まとめ

本来ならば今回の会議の中に中学校の先生を交える予定だった。１名確約が取れていたが授業の関係で欠席となってしまった。入り口と出口の意見交換ができるとより有意義な形になったかもしれない。ただ、連携の具体的な話もできたので新年度からアクションを起こしていく良いきっかけになった。

３－７　徳島県（担当校：龍昇経理情報専門学校）

文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
高等専修学校の学びの「セーフティーネット」
令和３年度　地域連携委員会（徳島地区）実施報告

開催校　龍昇学園 龍昇経理情報専門学校

１．第１回地域振興分科会（徳島県における地域連携）実施概要

Ⅰ　実施日時　　令和４年１２月２６日（月）１４：００～１５：３０
Ⅱ　実施場所　　龍昇経理情報専門学校（徳島市蔵本町２丁目３６番地）
Ⅲ　参加委員　　笹賀　和男（徳島県スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ））
　　伊藤　千代（徳島市適応指導推進施設指導員）

杉本　恭介（徳島市加茂名中学校校長）
小川　善弘（徳島市徳島中学校校長）
梶原　秀文（徳島市八万中学校教頭）
豊田　　勝（徳島市城西中学校教諭）
根津　道子（徳島市城東中学校教諭）
藤川　　靖（徳島市南部中学校教諭）
中川　弥生（徳島市富田中学校教諭）
久次米健一（龍昇経理情報専門学校校長）
横山　鉄也（龍昇経理情報専門学校名誉校長）

2．久次米校長あいさつ

笹賀先生，各委員の皆様，お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。日頃は本校教育に多大なご支援とご協力をいただき重ねて御礼申し上げます。

本校では令和３年度に全国簿記電卓競技大会電卓の部で団体準優勝・個人第３位，令和４年度には同大会簿記の部で団体第３位・個人準優勝することができました。中学校の先生方の熱心な後押しのお陰だと思います。

本日は，委員の皆様にご協力いただき実り多い会となりますようよろしくお願いします。

3．本会の説明

不登校等の生徒の増加は徳島県でも例外でなく，その生徒たちが「学びのセーフティネット」の役割を果たす高等専修学校で学ぶことにより自立するきっかけとなっている。第４期教育振興計画では「幼児教育・義務教育の基礎の上に，高等学校，さらには大学，高等専門学校，専門学校，大学院までが，より一層の連続性・一貫性の中で有機的につながりを持つとともに，これらが産業界や国際社会も含めた幅広い社会のニーズに応えるものとなること」等が諮問されている。生徒の将来を考え，生徒・保護者に高等専修学校を広く知ってもらうためにどのような内容や働きかけがいいのか，率直なご意見をいただき，「連続性と一貫性の中で中学校と高等専修学校の有機的なつながり」について研究を深め，今後の広報に活かしたい。

説明スライド

高等専修学校にみる「学びのセーフティネット」から

「連続性と一貫性の教育の有機的つながり」を考える

2022年12月26日（月）14時～15時30分
龍昇経理情報専門学校１号館１階

会の流れ

1　校長あいさつ（3分）

2　自己紹介

3　会の説明（4~5分）

4　意見交換（５０～６０分）
（1）中学校（先生方），生徒，
　　保護者方への有機的つながり
（2）その他

5　助言（２０～３０分）

参加者
笹賀　和男（徳島県ＳＳＷ）
伊藤　千代（徳島市適応指導推進施設）
小川　善弘（徳島中学校　校長）
梶原　秀文（八万中学校　教頭）
杉本　恭介（加茂名中学校　校長）
豊田　　勝（城西中学校　教諭）
中川　弥生（富田中学校　　教諭）
根津　道子（城東中学校　教諭）
藤川　　靖（南部中学校　教諭）
横山　鉄也（龍昇経理情報専門学校）

論点 中学生が卒業後の進路の一つとして高等専修学校を意識できるために，どのような働きかけが効果的か。

会の趣旨

不登校生，多様な個性のある生徒の増加は徳島県でも例外でなく，その生徒たちが「学びのセーフティネット」の役割を果たす高等専修学校で学ぶことにより自立するきっかけとなっている。中学校卒業後は公立高校への進学率が高いが，生徒や保護者が高等専修学校を知ることは生徒にとって選択肢が広がるだけでなく，入学した生徒の学習は社会人となるための学び直しにもつながっている。

8月にご協力いただいたアンケート結果から高等専修学校の認知度が高くないことが指摘された。また，第4期教育振興計画では「有機的につながりをもつ」ことが諮問されている。生徒の将来を考え，生徒・保護者に高等専修学校を広く知ってもらうためにどのような内容や働きかけがいいのか，率直なご意見をいただき，「連続性と一貫性の中で中学校と高等専修学校の有機的なつながり」について研究を深め，今後の広報に活かしたい。

調査より

	徳島県			全国		
	生徒総数	不登校生徒数	割合	生徒総数	不登校生徒数	割合
H２９年度	19,240人	498人	2.59%	3,357,435人	108,999人	3.25%
R３年度	17,850人	953人	5.34%	3,266,896人	163,442人	5.00%

令和３年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）

不登校生徒・・・徳島県１８.７人に１人，全国２０人に１人（病気・経済的・コロナ等を除く）

第3期(2018～22)教育振興基本計画（文科省）
・誰もが社会の担い手となるための学びのセーフティーネットを構築・・・教育費負担軽減，多様なニーズに対応した教育機会の提供 など

第4期(2023～27)教育振興基本計画（諮問）
・幼児教育・義務教育の基礎の上に，高等学校，さらには大学，高等専門学校，専門学校，大学院までが，より一層の連続性・一貫性の中で有機的につながりを持つとともに，これらが産業界や国際社会も含めた幅広い社会のニーズに応えるものとなること

※ 有機的なつながり(参考)
異なる役割を持った多様な部門(人たち)が，組織全体として1つの目標を達成するために，お互いに不可欠な相互作用をする補完関係

今までの流れ

専修学校における地域産業中核的人材養成事業　学びのセーフティーネット機能の充実強化　地域振興分科会（調査研究）

2020年度
・徳島県における地域連携・・・企業の求める人材，今後必要とされる人材について
・会社はどのような力を持った人材（生徒）の受け入れを望んでいるか
・中学校はこれからの時代に必要とされる力を育むための取り組み
<コミュニケーション，挨拶，人間関係，自己肯定感，主体性，自主性，協力，感謝，ほめる，認める>

2021年度
・生徒の進路選択の幅を広げるための高等専修学校の広報の在り方，高等専修学校アンケートについて
<高等専修学校の取組，強み・イメージが膨らむ情報の発信，中学校の進路指導，高等専修学校卒業後の進路，学校見学，中学校の教師の高等専修学校のとらえ方>

2022年度
・「学びのセーフティネット」から「連続性と一貫性の教育の有機的つながり」を考える

本校の広報

①学校訪問1校2～3回／年(中学校・適応指導教室) ②学校説明会(10月) ③学校見学(随時) ④リーフレット・ＨＰ　等

注意していること

この会議の主体は「中学校の生徒・保護者の進路を考えるとき，社会的に高等専修学校の果たす役割を再認識していただくもの」であり，龍昇経理情報専門学校の宣伝にならない会を進めること，高等専修学校全体を考えることとする。

高等専修学校あれこれ

中学校卒業後のもうひとつの進路　未来をひらく高等専修学校
（文部科学省　総合教育制作局　生涯学習推進課　専修学校教育振興室　H30作成　より）

1 「高等専修学校」とは
専修学校のうち，中学校卒業者を対象とした高等課程を設置する学校 。○○

生徒の多様な学びを提供する場

(1)柔軟な制度特性を活かした特色ある教育の展開
(2)実践的な職業教育，特定分野でのスペシャリストの養成
(3)社会での自立に向けた個に応じた教育

2 学校教育法上の位置づけ
学校教育法第１２４条【専修学校の目的と定義】
１２５条【専修学校の課程】
１２６条【専修学校の名称】

中学卒業後の進路
・高等学校（３年~）全日制・定時制・通信制
・高等専門学校（５年）
・高等専修学校（１年~３年）
大学受験資格付与指定校は３年
・就職

3 特徴
(1)資格を取得できる …… 工業，医療・教育・社会福祉，調理，理容・美容，商業実務，服飾　等
(2)不登校経験者の自立を支える …… 不登校を経験した生徒の割合は約２０％
(3)多様な個性のある生徒の自立を支える ‥ 支援が必要な生徒の割合は約１８％
(4)夢の実現をサポートする …… クリエイター系，エンターテインメント系，語学・国際系　など

高等専修学校あれこれ　－学校法人能昇学園　能昇経理情報専門学校　高等課程－

所在地	徳島市蔵本町２丁目（ＪＲ蔵本駅前）
生徒数	2022年度　58名

教育目標　新しい自分を見つけ，自分の未来を拓こう

(1)生徒パワーアッププロジェクト<独自の教育>
○各種検定　○ｅスポーツ・ものづくり　○オンライン授業　○スクールカウンセラー　○無学年式クラウド型ＡＩ教材　など
(2)ローカルコネクトプロジェクト<地域・学校連携>
○ボランティア活動（蔵本駅周辺）　○防犯パトロール（12月に地域を巡回）　○SDGs　○全国簿記電卓競技参加 など
(3)コンパスプロジェクト<企業・専門学校・大学連携>
○職場体験・会社訪問　○就職・進学セミナー　○オンライン模擬面接 など

環境・食品ロス

学校アラカルト
遠足，修学旅行，能昇祭，eスポーツ大会
ボーリング大会，スケート研修
徳島県の農業・産業・工芸体験
<さつまいもプロジェクト，阿波和紙・藍染・大谷焼>

R3全国簿記電卓競技大会
電卓の部　団体準優勝・個人第３位

R4全国簿記電卓競技大会
簿記の部　団体３位・個人準優勝

主な進路 直近3年	四国大学，文理大学，鳴門大学，岡山商科大学，徳島六欠カレッジ，健祥会学園，四国歯科衛生士学院，県美容学校，神戸医療福祉専門学校
	喜多機械産業(株)，四国高速運輸(株)，(株)ハローズ，(株)あきんどスシロー，日本ガード(株)，(株)キューエイ，(株)リカイ引越センター，自衛隊

高等専修学校あれこれ　－学校法人能昇学園　能昇経理情報専門学校　高等課程－

不登校を経験した生徒の割合

	割 合
H29年度	61%
H30年度	57%
R1年度	61%
R2年度	47%
R3年度	53%

不登校を経験した生徒の
約70%超が登校

進路　①大学10~20%
②専門学校10~30%
③就職60~70%

学びのセーフティネットとしての役割

○ 不登校を経験した生徒の入学 ➡ 56%（直近５年間の平均）

○ 適応指導教室に通級
特別支援学級に在籍
少人数で学びたい
学び直したい ➡ 進学先の一つ

○ 真面目で思いやり◎
コミュニケーション△
自己肯定感△△

本校の姿勢

社会的自立に向けて一歩を歩み出す

- 社会貢献
- 個性の尊重
- 信頼関係
- 公徳心

生徒のつぶやき　－不登校を経験した生徒に対面で聞いた－

8．夢、希望

- 大　　学 ・・・ 外交官，公務員，心理学を学びたい
- 専門学校 ・・・ イラストレーター，声優，パテェシエ（自分の店を持ちたい）
- 就　　職 ・・・ バスの運転手，介護士
- そ の 他 ・・・ 友人と飲みに行く，普通に生活し楽しみたい

9．後輩に一言

- リセットしてよく頑張った。自分を変めたい。
- 好きなことを一生懸命する。したいことが見つけられた。声優として名前が出るのが楽しみ。
- 友人を作って行事に参加したらいい。仕事に対してわくわく感がある。
- 今頑張らなくていい。いつか頑張れるときが来る。
- とことん悩んだら相談（友人，ＳＣ，信頼できる先生）する。
- 追い詰めるようなこと（親が不機嫌になる，学校に行けと言う など）はしないように。ほっとくのもダメ。タイミング。
- スイッチを切り変えるのは自分で変える。
- 友人がいないだけなら学校に行っておいた方がいい。いじめとかは別。学校に行かなかったことで自信がなく，劣等感がある。

（参考１）生徒のつぶやき　自己肯定を獲得する一過程

自己を肯定する力を獲得するために影響が大きいと考えられること

中学校まで

①本人の力（幼児～小・中学校時代に獲得した力・自力）
②学校の意義・・・学校に行きたいという気持ち
③母親(関わってくれる家族)の存在，家族(母親)に感謝できる
④中学校の担任先生の家庭訪問

高校入学後

⑤特別扱いしない友人・過去(不登校だった頃)を知らない友人がいる
⑥タイミング・・・高校入学（心機一転）
⑦本人に合った高校選択・・・自信を取り戻せる

（参考２）生徒のつぶやき　自己肯定を獲得する一過程

自己を肯定する力を獲得するために影響が大きいと考えられること

＝「自力」×「認めてくれる人の存在」×「大人(保護者・教師)の役割」×「友人」

●夢や目標
●幼児期～中学校で獲得できた力
●「学校に行きたい」という気持ち

●家族
●教師
●友人
●店長・店員
※普段，言われない人から
認められると　うれしい

●聴く・・・7：3で聴く
●本人を認める(行為を褒める)
●味方になる
「大人は敵なんじょ」
●あかんもんは，あかん
●子どもの前で悪口を言わない
●失敗してもいいじゃないか

●自分をわかってくれる
●同じような経験
●共通した趣味

多様な学ぶ場所があるが、
やはり「学校」の存在は大きい

４．意見交換

【伊藤　千代（徳島市適応指導推進施設）】

貴校が行う学校説明会が楽しみである。中学校の時，不登校だった生徒がその会で自分を表現できている。驚きと感動である。どうしてそうなるのかと考えたとき，このままではいけないと自分が変わろうとする気

持ち，勉強の他にボランティアを通して親，教師，地域の方から認められ，社会の一員としての立場の自覚ができるのだろう。このあたりのことをもっとアピールしてもいいのではないか。

【梶原　秀文（八万中学校教頭）】
生徒にとって居場所，所属感，承認が大事だと感じている。貴校に生徒を連れて学校見学に来た時に見せてもらったビデオで，ここにはそれらがあることを実感した。龍昇=居場所であり，ボランティアや検定で認められる。３つが機能しているのが今の生徒であると思う。

【藤川　靖　（南部中学校教諭）】
学校説明会で貴校の生徒が書いた作文をいただく。受験校を決めかねている生徒に作文を読ませると，貴校が選択肢の一つになった。説明会の様子や貴校の紹介ビデオをホームページ（以下「ＨＰ」）でもっと発信すればいいのでないか。また，「経理情報」の専門学校というイメージがあるが，それだけではないことを知らせたい。

【豊田　勝　（城西中学校教諭）】
中学校で進路指導をしていると，大学への進学率も高まっていることもあり，高校卒業後の進路にも保護者の関心は高い。また，高校や大学の名称も進路選択の一つになっているようなことがある。高等専修学校卒業後も大学進学や就職においては高等学校卒業と同様であることを知らない教師もいる。生徒も受検の直前に高等専修学校の名前や場所，学習内容を知る。しかし，龍昇に入学し，初めて良さがわかる生徒が多い。伝える難しさはあると思うが，例えばパンフレットを１年，２年，３年の全教室に掲示をする等の広報もいいのではないか。

【梶原　秀文（八万中学校教頭）】
進学に際し親の反対にあっても，教師が学校の情報をたくさん知っていれば，それを生徒に提供することができる。視野を広く見ることも必要である。

【中川　弥生（徳島市富田中学校教諭）】
貴校のＨＰを見た。１年生の担任をしており，学活で高校紹介のＰＨを見せながら進路指導をする。生徒に「高等専修学校を知っているか」聞くと，「知らない」「分からない」という返事が多い。しかし興味がないわけでない。高等専修学校がどんな学校か，何を学習し，どのような大学やどのような就職先があるのか，また専門学校で２年間学習するのではどのような違いがあるのか等を学習させたい。学習に自信がない，学習が苦手，不登校だから高等専修学校に進学するのでなく，高等専修学校で何ができるかを知らせたい。そのためには１年生，２年生から情報を提供することも必要ではないか。

【根津　道子（城東中学校教諭）】
龍昇は少人数で手厚い指導をしてくれる学校で，学習に不安がある生徒や自信がない生徒を中心に個人面談等で話をする。ｅスポーツやドローン等，教師が知らない部分があり，ボランティア活動等を通して不登校だった生徒が大勢の人の前で学校紹介ができるまで変容していく生徒の実例を知り驚いている。こうしたことを多くの教師に伝えることは大切だと思う。

【杉本　恭介（加茂名中学校校長）】
中学校を卒業した生徒の進学先は，龍昇の他に，高校，通信制高校，高等専門学校などがある中で，施設設備，卒業後の進路等で生徒や保護者の選択は高校になることが多くを占める。龍昇がどういった生徒を募

集するのかはっきりさせると龍昇を第一希望にする生徒もいると思う。不登校生がクローズアップされているが，本来はそうでないのではないと思う。広報の方法も変わってくる。中学校の教員が龍昇のことを生徒や保護者に話をするとき，不登校生徒が多く入学すること，卒業後の進路が広いことなどである。龍昇がどういった生徒を募集するビジョンや今後どうしていくのか，高等専修学校のポジション，重要性や役割，目指す学校像をはっきりさせることは大切だと思う。

【伊藤　千代（徳島市適応指導推進施設）】

セーフティネットの視点から考えると，学校へ行けていない不安，自信のなさ，中学校で何をしたのか答えられない生徒に対してチャンスをもらえる学校である。そうでない生徒に対して教師が龍昇のことを伝えるためには，実際に見ないと本当にわからない。伝える手段や方法に工夫が必要だと思う。例えば学期ごとに龍昇新聞を教室掲示することにより，生徒や教師の目に常に触れることになる。そこから興味関心を持った先生に来てもらうこともできるのではないか。

【小川　善弘（徳島中学校校長）】

資料によると高等専修学校は学びのセーフティネットの役割を果たすように，不登校を経験した生徒の割合は２０％，支援が必要な生徒は１８％である。一方，徳島県は高校進学率が全国でも上位であるように高校に進学する生徒が非常に多い。こうしたことを考えると，高等専修学校の強みは，例えばｅスポーツ，ドローンなどの将来自信につなげられる高等専修学校ならではのカリキュラム，誰一人取り残さない教育を進めることではないか。やはり，ＨＰ，検定実績，地域に根差した教育などの認知度を上げていくことが大切ではないか。

５．笹賀　和男（徳島県ＳＳＷ）委員より

（資料より一部抜粋）

１大切にしていること

（１）鮎は瀬につく，鳥は樹にとまる，人は情けの下に住む

（２）非常に価値がある宝物はすでにあなたの手の中にある

「人間と人間の関係」

（３）勇気づけ（一歩踏み出す勇気）

２中学生が卒業後の進路の選択として高等専修学校を意識できるために，どのような働きかけが効果的か。

（１）内部分析

マイケル・ポーターの戦略

高等専修学校の理念の明確化とワンチーム

高等専修学校の強みの視覚化

（２）環境分析

多様な個性のある生徒の増加

学びのセーフティネットの役割

学びの連続性

学びの一貫性

（３）スクールソーシャルワーカーの活用について

ＳＳＷ活用の流れ

（４）生徒への支援

動機づけと勇気づけ

認知行動療法

6．おわりに

笹賀先生から貴重なご示唆，委員のみなさま方から活発なご意見やお考えを頂戴して重ねて御礼申し上げます。今後の高等専修学校の在り方，広報の方法について再考していこうと思います。本日は，ありがとうございました。

7．第2回地域振興分科会（徳島県における地域連携）実施概要

実施日時：1月29日　15：00～16：30

実施場所：龍昇学園

参加委員

藤村　泰之	株式会社　日産サティオ徳島　代表取締役社長
	株式会社　Ponte　代表取締役社長
中岸　真史	鳴門ガス　株式会社　代表取締役専務
太田　恵理子	株式会社　ハビリテ　代表取締役社長
濵田　慶太	株式会社　濵田印刷　取締役
久次米　知英子	学校法人　龍昇学園

テーマ

未来を創っていく学生生徒や、高等専修学校に求めるもの、高等専修学校卒業生・不登校経験者が入社してきたときに既存の社員との関りや成長について。

8．委員との意見交換

・痛みを知っている人達だからこそ、人に寄り添う力がつよい。積極的に採用したいと考えている。
・職種によっても様々だが、コミュニケーション能力は必須になってくる。人との関り方などはよく見ている。
・どの学校種卒業かよりも、人間性や社風と合うかどうかが重要。学力が高い学生生徒よりも生きる力が強い学生生徒を入れていきたい。
・自分はこれができるという強みが必要だと感じている。それが本人の自信につながって会社でも生き生きと仕事をすることができる。
・採用時に一緒に働くことになる社員にも見てもらっている。そうすることで、社員の人たちも「育てる」意識が生まれる。社内での理解を促す目的もある。
・特性がある人も適材適所で配置をしているが、マルチタスクをこなす人との差（昇給など）をどうしていくかは今後の課題。
・高等専修学校の強みを活かして企業と連携をするカリキュラムを作成するのはどうだろうか。
・学校内企業説明会を実施して、企業とのマッチングを図っていくのが良いのではないか。

9．まとめ

高等専修学校に通う生徒の心の痛みを企業も理解をし、活躍の場や社内理解を深める工夫をしていることが分かった。

学校種にこだわることなく、人間性やコミュニケーション力などその人自身を判断し、企業としてともに成長していく仲間をつくりあげていく姿勢がある。

しかし、特性を理解したうえでも、社内での評価方法や周りの社員との整合性の部分での課題は見て取れ

る。高等専修学校として、企業と連携を図りながら、卒業後に生徒が自分で自分の人生を歩んでいける人間力の育成に力を入れることが求められていると感じた。

【参考資料】

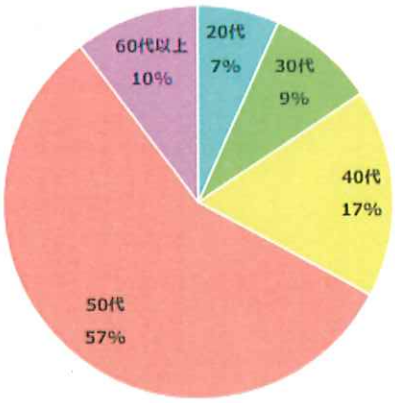
高等専修学校に関する アンケート調査結果

文部科学省委託事業
「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
学びのセーフティネット機能の充実強化
高等専修学校の機能高度化に関する調査研究

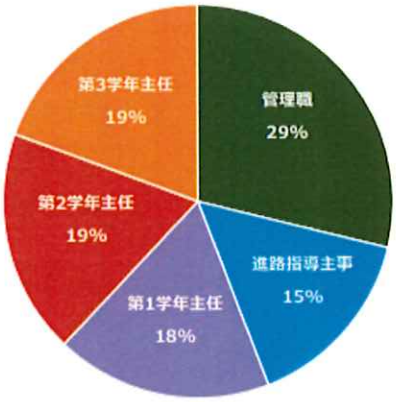
回答期間：令和4年7月15日～8月10日
対象：徳島県内の中学校教職員の方
回答者数222名

1

年齢をお答えください

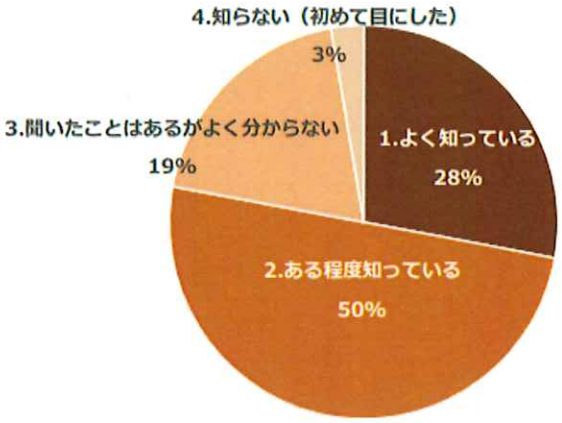


役職をお答えください



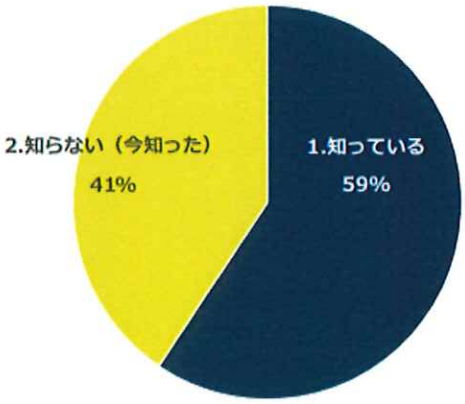
2

高等専修学校（専修学校高等課程）という学校種を知っていますか。



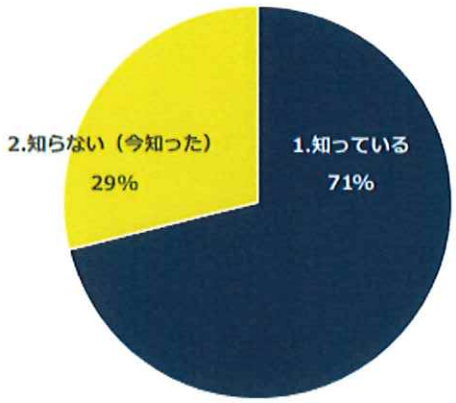
3

高等専修学校は、国の修学支援制度である【高等学校等就学支援金制度】の対象校であり、授業料において私立学校と同等の支援を受けられることを知っていますか。



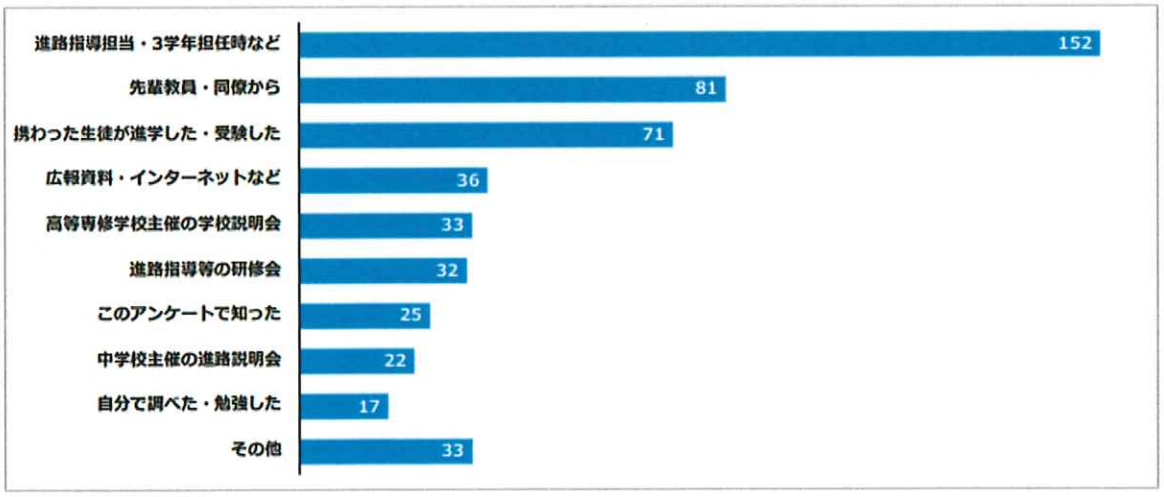
5

高等専修学校は、文部科学省により高等学校と並ぶ正規の後期中等教育機関として認められており、就職において高等学校と同様の扱い、また大学入学資格付与指定校は大学等へ進学できることを知っていますか。



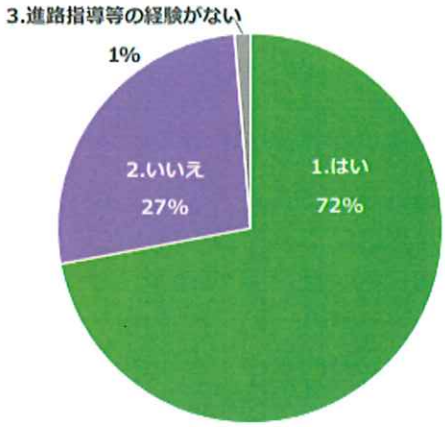
6

高等専修学校のことを知ったきっかけを教えてください（複数回答可）



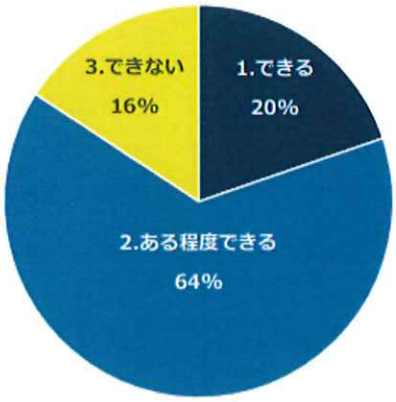
7

進路指導や進路相談で、生徒・保護者に高等専修学校（専修学校高等課程）を紹介したことがありますか。



8

進路指導や進路相談で、生徒・保護者に高等専修学校（専修学校高等課程）の説明をすることができますか。

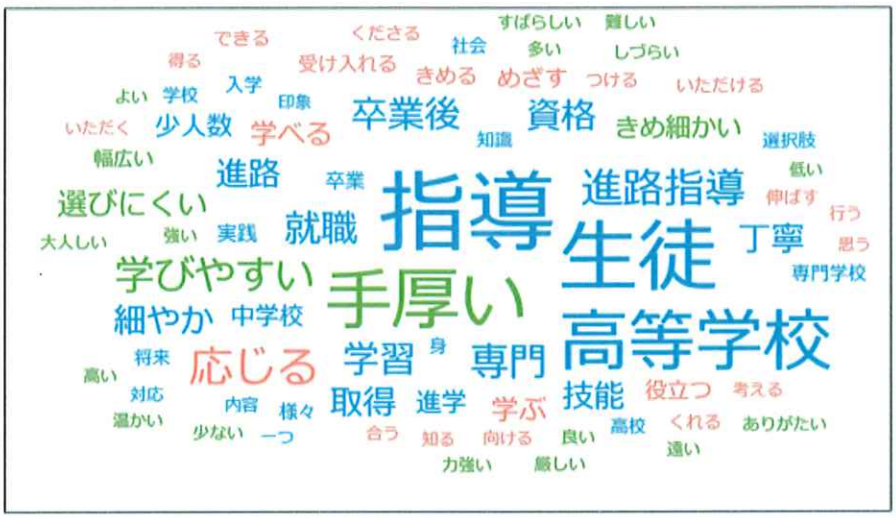


9

高等専修学校（専修学校高等課程）についてどのようなイメージをお持ちですか。

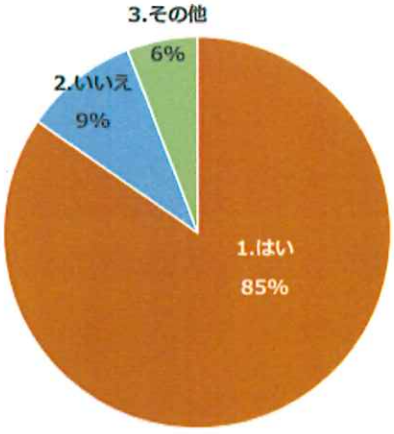
222名中 143名が回答

テキストマイニングによる分析結果をワードクラウドで表示
(出現頻度順)



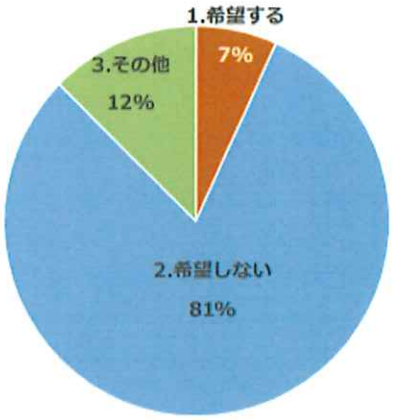
10

機会があれば高等専修学校（専修学校高等課程）の情報をもっと知りたいですか。



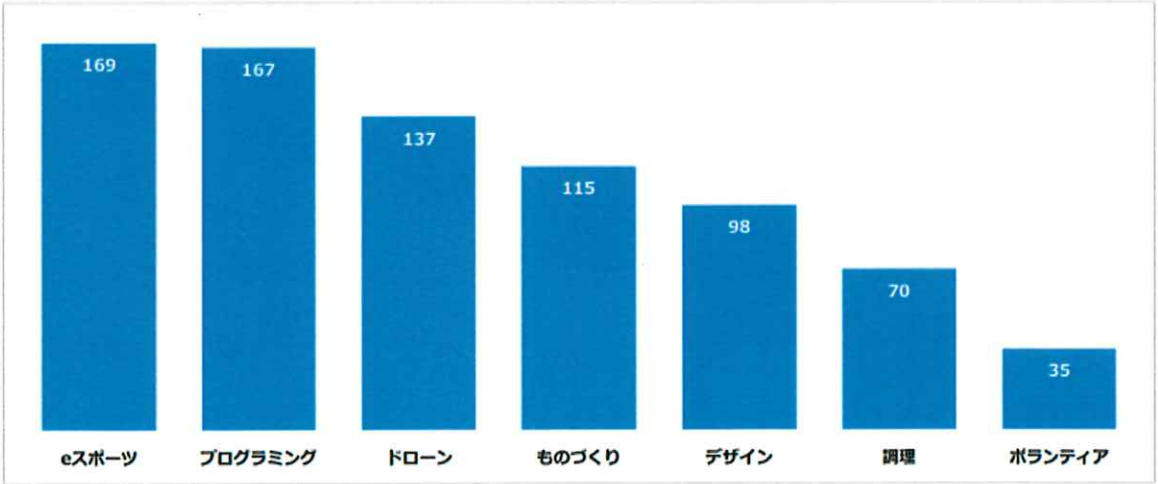
11

夏休み等に、高等専修学校（専修学校高等課程）による出前授業の実施を希望しますか。



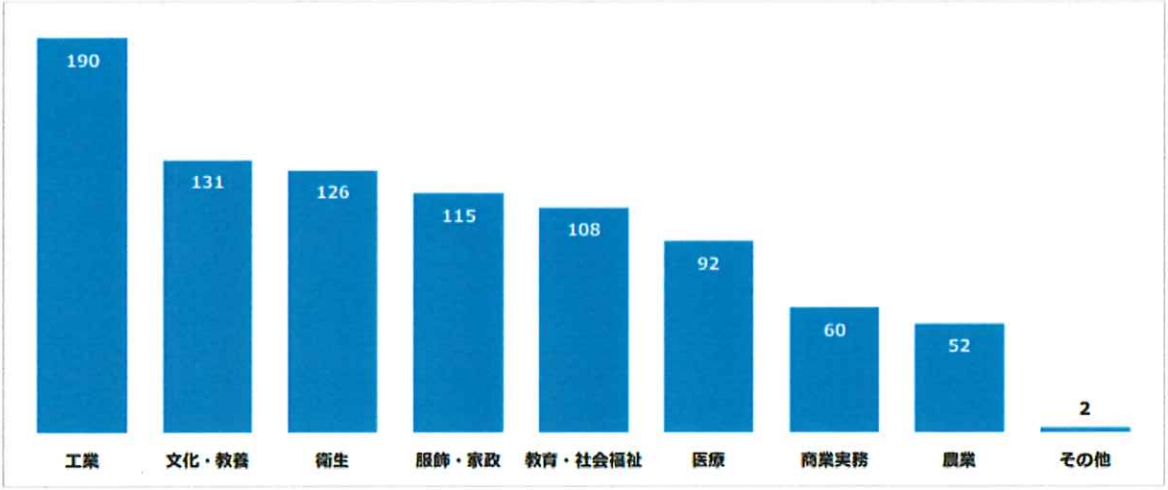
12

子どもたちにとって興味・関心があると思われる教育ツールを選択してください（複数選択可）



13

子どもたちにとって興味・関心があると思われる教育分野を選択してください（複数選択可）



14

高等専修学校（専修学校高等課程）として、今後期待する取り組みがあれば、ご意見をお聞かせください。

222名中 59名が回答

期待する取り組み	回答数
広報	20
分野の拡充	9
オープンスクール	6
現状で充分	4
専門的な力の習得	4
セーフティネット	3
社会連携	3
就職の保障	2
個別指導	2
時代のニーズにあった教育	2
育成型選抜試験	1
10年後を見据えた教育実践	1
教員への学校概要説明	1
通信制との違い	1

15

全体を通して、ご意見・ご要望がございましたらお聞かせください。

- 専修学校のことを説明するとなると、しっかりとした説明ができないので、学んでいこうと思った。
- より時代に即した取り組みを常に模索されているのだと思います。
- 授業の様子（特にeスポーツ関係）や資格の習得等、今後も教えてください。
- 今後とも、生徒の将来の自己実現に貢献してほしい。
- いつも、丁寧で温かいご対応に、心から感謝している。
- 生徒一人ひとりに丁寧にご指導していただいて、大変ありがたいです。
- 丁寧に教えていただき、卒業生が自信をつけることができています。

16

全体を通して、ご意見・ご要望がございましたらお聞かせください。

- 大切な教育を受けられる所なので、これからもよろしくお願いします。
- 個に応じた指導を丁寧にしていただき、とてもありがたいと感じています。毎年挨拶に来ていただいていますが、今後もしっかり連携がとれたらと考えています。
- また生徒がお世話になることがありましたら、よろしくお願いします。
- 生徒の進路選択の一つとしていつも考えています。
- 制度上、高校卒の認定にならないことに、ずっと疑問を感じています。

  ※学校種が異なるため、高校卒ではありませんが、p.6のとおり
  就職・進学において、高卒認定試験を受験する必要はありません。

17